

An Overview 解説

Finnish Dance Today

———— Akiko Tachiki (dance critic)

フィンランドのダンスの現在 ———— 立木燐子 (舞踊評論家)

中心の消失と拡散。90年代以降のヨーロッパのダンス状況を地政学的に特徴づけているのが、この現象だ。表現の多様化が進む一方、情報ネットワークやメディアの発展により創作上のアプローチや発想が似通ってくるという傾向も見られ始め、近年、独創性という創作の基本が創り手に問い直されている。そんな中で、2004年の「リヨン・ダンス・ビエンナーレ」が改めてヨーロッパを特集するにあたり、これまで“主流”とみなされてきたフランスやドイツではなく、かつて“周縁”と呼ばれてきた東欧や北欧あるいは地中海沿岸地域などに焦点を当てたことは、現状を的確に踏まえた企画として評価できるだろう。実際、今、コンテンポラリーダンスの世界では、後発でありながら未知数の魅力をたたえたこれらの地域からの新鮮な表現に注目が集まっているのだ。

中でも、このところ急浮上してきているのがフィンランドのダンスである。エネルギーで骨太、スタイリッシュで技巧的、というよりむしろ身体存在感が屹立するその持ち味は、ヨーロッパでも独特の輝きを放っている。たとえば、2005年、筆者が観た内外の創作作品で、最も印象に残っている舞台は、フィンランドを代表する振付家、テロ・サーリネン (Tero Saarinen) の『Borrowed Light (反射光)』(2004年初演)だった。

これは、18世紀末にイギリスからアメリカへと移住した清教徒のなかでもとりわけ戒律に厳しいシェーカー派の人々をテーマにした作品で、緻密に練り上げられた舞台は緊張感に満ち、禁欲のなかに信仰の高みへと至る人々の精神性を的確に表現していた。ボストン・カメラータによる無伴奏の合唱が、不均衡で変形な動きで構成されるミニマルな振付と絶妙にかみ合い、ミキ・クント (Mikki Kunttu) の自然光を意識させる照明と相まって、抑制の効いた動きがエネルギーを孕みながら宗教的高揚感へと昇華されていく説得力は圧巻だった。

フィンランドのダンスの歴史

フィンランドのダンスの歴史は、その他のスカンジナビア諸国 (ロマンティック・バレエの伝統を誇るデンマーク・ロイヤル・バレエを擁するデンマーク、スウェーデン王立バレエ、クルベリー・バレエなどで知られるスウェーデン等) と比べて、決して長いものではない。バレエを含め、芸術としてのダンスがフィンランドに根づいたのは20世紀になってから。しかし、逆にその伝統の希薄さが、自由で独自のダンスを育む環境を生み出したとも言える。宮廷によって支えられた貴族的な舞踊文化が未成熟だったこともあり、結果として、それに縛られることなく、新しいダンスの萌芽が促された。

バレエ

フィンランドの舞踊史の流れは、日本の現代舞踊の歴史とやや似ており、1920年代にバレエとモダンダンスが相前後して紹介されている。イサドラ・ダンカンがフィ

An Overview

Finnish Dance Today

フィンランドのダンスの現在

ンランドに初めて来訪したのが1908年で、同じ年にアンナ・パヴロヴァとマリインスキー劇場のダンサーたちがサンクト・ペテルブルグより来演している。その後、1917年、ロシア帝政から独立したフィンランドに当時勃発したロシア革命を逃れたダンサーたちが定住、1921年にはフィンランド・オペラ劇場に専属のバレエ団が創設され、これが1956年に国立バレエ団に改称される。

バレエにおいては、隣国ということもあって、ロシア・バレエから多くを学ぶ一方、歴史的経緯のため政治的には距離があり、底流にアンビバレントな感情も存在しているようだ。フィンランド国立バレエ団の基礎が築かれた最初の40年間は、ともにロシアで学んだ二人のバレエ・マスター、ジョージ・ゲー（George Ge）とアレクサンダー・サクセリン（Alexander Saxelin）の下でロシア・バレエの影響を受けて発展した。

モダンダンスとコンテンポラリーダンス

モダンダンスでは、地理的に近いという関係もあり、1920年代以降、ドイツのモダンダンス（表現主義舞踊）が流入し、フィンランドのダンスに大きな影響を与えた。1926年にはメリー・ヴィグマンが、1937年にはクルト・ヨースとそのカンパニーなどがヘルシンキで公演を行っている。「フリーダンス」と呼ばれたフィンランドのモダンダンスの担い手たちは、20から30年代には、専らドイツを含む中央ヨーロッパへ新しいダンスを学びに出かけた。また、60年代になると、マーサ・グラハム、マース・カニングハム、アルヴィン・エイリーなどアメリカのモダンダンス、ポスト・モダンダンス、ジャズダンスが人気となり、その影響により抽象的で動きを重視したダンス・カルチャーも生まれてくる。

フィンランドにおいてモダンダンスが本格的に自立した芸術領域としての力を見せ始めるのは、1970年代である。この国のダンス界の発展に貢献した2つの重要なカンパニー、「ダンス・シアター・ラーティコ（Dance Theatre Raatiko）」が1972年、「ヘルシンキ市立劇場ダンス・カンパニー（Helsinki City Theatre Dance Company）」が1973年に相次いで設立された。演劇においては、フィンランド語とスウェーデン語を公用語とするこの国で、フィンランド語演劇の台頭は国家的アイデンティティの獲得と独立運動と結びついてきたが、遅れて発展したダンスの領域では、この時期に至ってフィンランドらしいアイデンティティが模索されるようになる。また、この2つのカンパニーをベースにして80年代にはコンテンポラリーダンスも台頭してくる。

ダンス・シアター・ラーティコと創設者マルヨ・クーセラ

ラーティコの創設者であるマルヨ・クーセラ（Marjo Kuusela）はそのダンス・ドラマの素材に、フィンランドの文学作品を選び、また社会的、政治的な視点を踏まえた身近な題材によって個性的で力強い作品を創った。たとえば、クーセラの代表作のひとつ『7人の兄弟』（1980）は、フィンランドの国民的作家、アレクシス・キヴィ（Aleksis Kivi）の小説に基づいた若者達の成長物語である。クーセラは、現在も現役の振付家として活躍する一方、1996年以降、ヘルシンキ・シアター・アカデミーで振付科の教授としてダンス教育に精力的に取り組んでいる。彼女のカンパニーからは、トンミ・キッティ（Tommi Kitti）をはじめ有数な踊り手を輩出しており、キッティは現在ではトンミ・キッティ・カンパニーを主宰している。

An Overview

Finnish Dance Today

フィンランドのダンスの現在

ヘルシンキ市立劇場ダンス・カンパニーと振付家ヨルマ・ウオッティネン
ヘルシンキ市立劇場ダンス・カンパニーは、その創作活動によって、常にこの国のダンス界に新風を送り込んできた。その軌跡は、フィンランドのコンテンポラリーダンスの歴史を辿るようだ。とりわけ、1982年以降9年間、フィンランドを代表する振付家として知られるヨルマ・ウオッティネン（Jorma Uotinen）が芸術監督をつとめた時代にカンパニーとしての基礎を確立したと断言している。

ウオッティネンはパリのカロリン・カールソンの元で活躍した後、ここの芸術監督に就任し、代表作『カレワラ（Kalevala）』や『パセティーク』を含む9本の作品を創っている。彼の作品はカールソンの影響を感じさせるが、視覚性豊かで、より官能的で濃密な情緒に富んだ作品を創る。たとえば、代表作のひとつ、チャイコフスキーの同名の曲にあてた『パセティーク』では、白いチュチュをまとった20名程の男性ダンサーたちが、蒼い照明のなかダイナミックな群舞を展開して音楽と溶け合う。全員が、反転しながら跳躍を繰り返していく場は高揚感に富み、マシュー・ボーンの『白鳥の湖』さえ想起させる。ウオッティネンは、その後、2001年まで、フィンランド・ナショナル・バレエの芸術監督に就任し、同団のレパートリーを大きく刷新した。

ウオッティネン以降、ヘルシンキ市立劇場ダンス・カンパニーの芸術監督は、カロリン・カールソン、マルヨ・クーセラ、ケネス・クヴェンストローム（Kenneth Kvarnstrom）、アリ・テンフラ（Ari Tenhula）ら、この国のダンスをリードしてきた錚々たる顔ぶれの振付家がつとめてきた。フランスのコンテンポラリーダンスの母、カールソンは、もともとフィンランド系のアメリカ人でもあり、ウオッティネンの後、1年間だけ芸術監督をつとめ、若い世代に多大な影響を与えた。また、クヴェンストロームはその後、2000年に交流のあったスウェーデンのダンセン・フス（Dansens Hus）のディレクターに就任している。なお、現在の芸術監督は、DV8出身の英国人振付家ナイジェル・チャーノック（Nigel Charnock）がつとめている。

以上、舞踊史を概観してきたが、フィンランドではバレエとモダンダンスが同時期に並行して発展した経緯もあり、バレエ、モダン、コンテンポラリーダンスの垣根はそれほど高くなく、ミュージカルやジャズダンスも含めてジャンルの壁は希薄であったため、振付家やダンサーたちもそれ程意識せずに多様なテクニクを学び、自由に活躍の場を求めることが可能となっている。前述のウオッティネンの例でもわかるようにナショナル・バレエもデンマークのように伝統との軋轢に悩むことなくコンテンポラリーダンスをレパートリーにしているし、バレエ・ダンサーが日本の舞踏（Butoh）を学ぶ例も少なくない。そうした柔軟性や多様な技術やスタイルに対してオープンであるという点が、フィンランドのダンスに自由闊達で伸びやかな個性を与えている。

フィンランドのダンスの特徴

コラボレーション

フィンランドでは、さまざまな他ジャンルのアーティストとのコラボレーションが活発で、とりわけメディア・アーティストや照明家などとのコラボレーションが盛んだ。個人的な印象だが、フィンランドのダンスには照明デザイン的に美しいものが多く、繊細な表情を持つ照明美術の発展は、夏は白夜で白く輝き、冬は闇が圧倒的に支配して、極北ではオーロラも観察されるというフィンランドの風土が持つドラマティックな側面と無縁ではないような気がする。

An Overview

Finnish Dance Today

フィンランドのダンスの現在

ミキ・クント (Mikki Kunttu)

フィンランドを代表する照明デザイナー。冒頭で紹介したサーリネンの作品では、ミキ・クントの自然光を模した照明が、禁欲的な生活を通して宗教的な高みへと至ろうとする精神性をテーマとする作品の世界を抽象化するのに貢献した。

マリア・リウリア (Marita Liulia)

マルチメディア・アーティスト。ストラヴィンスキーの音楽『春の祭典』をモチーフにしたソロ『Hunt』では、無音から音楽とともに身体が弾け出し、終盤、マリア・リウリアの映像が肉体に照射され、映像と身体が溶け合い、存在の多重性を浮かび上がらせる。情報化時代の身体を視覚的に表現して秀逸だった。

キンモ・コスケラ (Kimmo Koskela)

映像作家。気鋭の振付家アリア・ラーティカイネン (Arja Raatikainen) の代表作『Opal-D』ではラーティカイネンのシンプルな振付にキンモ・コスケラの東京を映した美しく活気のある映像が絶妙のコントラストを生んだ。

舞踏の与えた影響

また、フィンランドのダンス界では、舞踏への関心が高く、舞踏を学んだり、その影響を受けた振付家やダンサーが多いのも特徴となっている。その背景には、自然と融和する伸びやかな自然観や、国民の大半を占めるフィン人の源流が遠く迎ればアジアともつながるといふ身体感があるのではないと思われる。

たとえば、ヌードに対する感覚や姿勢は、フィンランド人の暮らしに溶け込んだサウナ文化とも関係がありそうだ。それは、ヨーロッパのほかの国、隣国スウェーデンのそれともまったく異なっている。裸は、フィンランド人にとっては、性を禁忌するタブーでも、逆にユートピア的な身体の解放でもなく、日常のなかを生きる極めて自然な存在のありようなのである。その意味で、肉体の真実や生の暗部を見つめ、病や死もダンス表現のなかに包含しようとする舞踏への関心が深いのも頷ける。

フィンランドでは、クオピオ・ダンス・フェスティバルの芸術監督を93年から98年の期間つとめたアジア芸術の研究者、ユッカ・ミエッティネン (Jukka Miettinen) がいち早く舞踏に注目し、カルロツタ池田と室伏鴻、大野一雄、山海塾、古川あんずなどを意欲的に紹介した。これを契機に、第一線で活躍するダンサーや振付家の中には、舞踏を学びに来日した人も少なくない。たとえば、フィンランド国立バレエ団のバレエ・ダンサーとして活躍後、現在は自らテロ・サーリネン & カンパニーを率いるテロ・サーリネンの場合、東京で大野一雄舞踏研究所に1年間在籍し、舞踏を学んでいるし、アリア・ラーティカイネンやアリ・テンフラも大野一雄や古川あんずに師事している。

フィンランドを訪れた舞踏家のなかには、ほかに岩名雅記などもいるが、中でも何度もワークショップなどを行って指導してきた故・古川あんずの影響が大きい。古川あんずは、大駱駝艦で活躍後、田村哲郎とともにダンス・ラヴ・マシーンを結成、その後、ドイツに移住、ヨーロッパを拠点に活躍を続け、多国籍なダンサーを擁してダンス・バターTokioを設立した。独特の諧謔性が際立つワイルドなダンス・シアター風の構成と、デフォルメされた身体の使い方などに、ドイツ表現主義舞踊と共通するものを見出したのが人気の秘密であろう。

フィンランドの大学で客員教授もつとめた古川あんずに、市立劇場では共同制作作品を委嘱し、1994年には、『春の祭典』、1995年には舞踏作品『棒 (Keppi)』と

An Overview

Finnish Dance Today
フィンランドのダンスの現在

『白い水 (Villi Vesi)』を現地のフィンランド人ダンサーを中心に踊らせている。前者をヘルシンキで見たが、エロティックな猥雑さのなかに、日本人舞踏家とは異なるダイナミックな踊りのエネルギーが発散されていて魅力的だったのを憶えている。フィンランド有数のダンサー、アリ・テンフラは古川の『春の祭典』で重要な役を踊っているし、東京のパルコ劇場で上演された『中国の探偵』には、アリア・ラーティカイネン、アリ・テンフラらが出演している。

また、フィンランドのダンサーたちは、活躍年齢が非常に長いことがひとつの特徴になっている。従来、西欧の舞踊概念では、ダンサーの第一線での活躍は40代くらいまでと考えられてきた。しかし、フィンランドでは先に説明した舞踏への関心の背景にある身体のリアリティを重視する意識、あるいは舞踏の影響からか、50代を超えて活躍しているダンサーは多い。

その他のアーティスト

アーティスト

すでに述べてきたように、フィンランドのダンス界では活動期間の息が長く、ベテランから新進気鋭まで層が厚い。前述したヨルマ・ウォティネンやテロ・サーリネンのほかにも、多数のアーティストが活躍している。

レイヨ・ケラ (Reijo Kela)

円熟の域に達し活躍をしている振付家・ダンサーたちのなかに、レイヨ・ケラがいる。ケラは、アメリカでマース・カニングハムの薫陶を受け、フィンランドに帰国後、60年代アメリカのパフォーマンス・アートとも共通する実験的な手法や野外パフォーマンスに挑み、社会的な問題意識や政治性を独自の表現に結実させている。

トンミ・キッティ (Tommi Kitti)

出自はジャズダンスだが、バレエ、ショーダンスなど多様なスタイルを融合し、エネルギーッシュな動きを駆使した力強い振付をする。

アルポ・アールトコスキ (Alpo Aaltokoski)

成年期になってダンスを始めながら、ソロ活動を中心によく鍛えられたシャープな動きと映像や照明を組み合わせたスタイリッシュな作品で評価されている。

スサンナ・レイノネン (Susanna Leinonen)

2004年青山ダンス・ピエンナーレで来日した新進気鋭の女性振付家。クラシック・バレエの語彙をコンテンポラリーな構成の中に巧みに散りばめる。フィンランド国立バレエ団委嘱の最新作『Trickle Green Oak』はチュチュような衣装をつけた4人の女性ダンサーが凍った滝をイメージさせるインスタレーションの前で踊る秀作。

イェンニ・キヴェラ (Jenni Kivela)

埼玉国際創作舞踊コンクールでグランプリ受賞。受賞作の『レッド・レター・デイズ (Red-Letter Days)』は、切れの良い動きで綴られるダンス・シアター的な作品。

An Overview

Finnish Dance Today
フィンランドのダンスの現在

ユルキ・カルトゥネン (Jyrki Karttunen)
ヘルシンキ市立劇場ダンス・カンパニーで活躍した後フリーとして活躍。

ヴィルピ・パッキネン (Virpi Pakkinen)
ヨガや東洋的技法を取り入れて魅力的なソロ活動を展開。

カンパニーとダンススポット

フィンランドのダンス・カンパニーの規模は、国立バレエ団を除いて比較的小さい。たとえば、専属ダンサー10名を抱えるヘルシンキ市立劇場ダンス・カンパニーのパンフレットの記述には、この国最大と謳われており、国際的な活動を続けるテロ・サーリネンのカンパニーにしても数人が基本で、必要に応じてプロジェクトごとに適当なダンサーを採用している。プロダクションに所属するかどうかに関わりなく、多くの有能なダンサーが独立して活動しており、ソロ公演が活発なのもこの国のダンスの特色となっている。

NOMADI

ダンスのプロダクションとして活発な活動を展開しているところの代表。アリア・ラーティカイネン、アルボ・アールトコスキー、イルキ・カルトゥネン (Jyrki Karttunen) などが所属。

また、公演を行う場である劇場やホール、スタジオについてだが、ヘルシンキ市内のナショナル・オペラ・ハウスを除いて、コンテンポラリー・ダンスのための大きなスペースはあまりない。ダンスを常時上演しているスペースとしては、ヘルシンキ市内の複合アート・スペース「キアスマ」と、工場跡地を再開発した「ケーブル・ファクトリー」が知られている。

キアスマ (Kiasma)

ヘルシンキ中央駅のすぐ近く、街の中心部にあり、モダンアートのギャラリースペースでもある。デザインや映像、メディア・アートでもマルチ・メディアを駆使した先端的なビジュアル・アートに焦点を当てており、企画のコンセプトがユニーク。モダンアートの展示と連動したダンス企画もある。ダンスのワークショップや公演が活発に行われている。

ケーブル・ファクトリー

広大なスペースに幾つかのビルをつなげ、ワークショップ、リハーサル、公演などのほか、アーティストの育成にも力をいれている。

なお、フィンランドダンスが活性化した要因としてヘルシンキ・シアター・アカデミーの舞踊学科や、北欧で最も古い歴史をもつクオピオ・ダンス・フェスティバルの存在があることを忘れてはいけない ([ビルエッタ・ムラーリ氏インタビュー参照](#))。今後ますますフィンランドのコンテンポラリーダンスに注目が集ることは間違いなさそうだ。